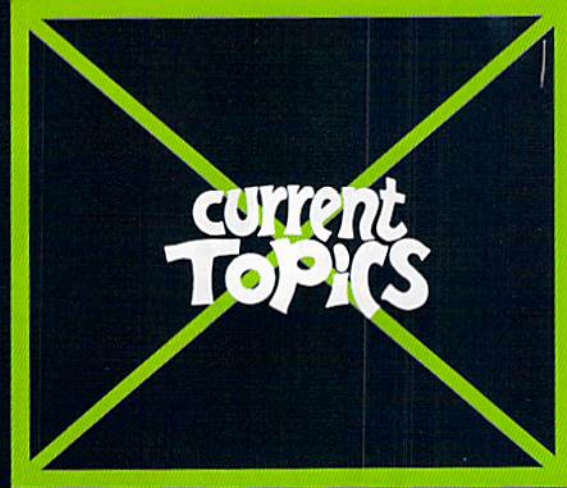


# FAREWELL & FAREWELL & FAREWELL &

DIZZY GILLESPIE &  
AUDREY HEPBURNを偲んで。



93年に入って、相次いで(7)影響力の大きいスターが亡くなる。まず1月6日にNYで、すい臓ガンのため亡くなったデイジー・ガレスピーのニュース。彼は、モダン・ジャズのスタイルの祖ビ・バップを作り出した人物の一人として忘れ難い偉大なランベット奏者である。彼が、セロニアス・モンク、チャーリー・パーカー、チャーリー・クリスチャン、ケニー・クラークらと共に、それまでのジャズと違って、もっと情熱的で起伏に飛んだゴキゲンなジャズを演奏し始めたのが30年代後半、40年代前半頃のこと。やがてこの新しいジャズはビ・バップと呼ばれるが、このビ・バップの動きの中で核となったのが特にチャーリー・パーカーとデイジー・ガレスピーだ。彼らの軌跡は、後のジャズの流れを大きく変えたことは言うまでもない。またデイジーは、ジャズのルーツであるアフリカの音楽と、キューバ音楽のミックス、アフロ・キューバン・リズムをジャズに取り込んだアフロ・キューバン・ジャズのムーヴメントを盛り上げた人物でもある。このムーヴメントのおかげで、モダン・ジャズが「一気に普遍的なエンターテインメントとなったのだ。アップ・テンポでホットな演奏を得意とするミュージシャンだけに、晩年のフレイに体力的な衰えは免れなかったようだが、76歳で逝ってしまうには、確かに惜しい、エネルギーが豊富なランベッターだった。若い人々がジャズに熱を上げている現代の音楽シーンを見て、デイジー

爺はどう思っていたんだろうか。そしてワイド・ショーにもずいぶん取り上げられたオードリー・ヘプバーンの死。1月20日のほとんどの新聞の一面はこのニュースで埋められてしまった。それほどまでに、彼女の日本人気は根強く、普遍的なものだったわけだ。1929年ブリュッセル生まれ。父はアイルランド系英国人、母はオランダ人。50年に映画『天国の笑い声』の端役でデビューした彼女は、53年『ローマの休日』で本格的に世界の注目を集める。当時の女優グラマラスでゴージャス、といったタイプとは正反対の、ボーイッシュでスマートなモデルタイプ。それが却ってメリハリのある美しいフラットな体型の日本人には、親しみ易く感じられたのかもしれない。その小粋で洗練された容姿、仕草、ファッションは、もう今更ここで言うまでもない。そしてその代表作は、どれもこれも、今尚色褪せることなくファッショナブルである。『シャレード』(53年)、『お洒落泥棒』(56年)、『そうぞう』(ティファニーで朝食を) (57年)も忘れてはならない。でも、オードリー・ヘプバーンの映画『ファッション・カタログ』として『ミラー』に楽しむなら『パリの恋人』(57)がびったり。タイトル・バックからして、正にバザール誌/原題『フアンニー・フェイス』は彼女の代名詞でもある。歳をとってからも、ずっと妖精のようなイメージを変わらせず持ち続けたオードリー。その出演作の数々はこれからもきつと世界中の恋人であるに違いない。

「グルービン・ハイ」/デイジー・ガレスピー



「パリの恋人(オリジナル・サウンドトラック)」/Gガーシュウィン

